

上前智祐

上前さんと知り合ってからもう十数年になるがその時、五尺そこそこのこの小男に秘められた異様なエネルギーに思わず、タジタジしてしまつたのを僕は今でも憶えている。この小さな身体からコンコンと湧く泉のようなバイタリテイはどこから生れるのであろう。二紀展に彼が出品していた頃。毎日会社に行く前に途中下車して写生をしていた。それで上前さんは必ず一番電車につて一日も欠かさずこの日課を課していたのである。まだ生活にゆとりのなかつた頃で残業して家に帰り夜おそくまで絵を描いてからのことであるからこの日課は常人ではとても考えられない計画である。しかし或る日上前さんにもついにこの記録に終止符を打たねばならぬときが来た。その日彼がプラツトホームにのぼつた途端にドアがしまつて動き出した。几帳面な彼はそれでも後尾の車掌室をみつけてしがみついたがまだえのぐを入れたリュックや重いイーゼルをもつた身体が室内に入らぬうちに電柱にぶつつかかり昏倒してしまつた。この根性はやがて具体の会員になつてから一そう光彩を放つてきた。

彼はそれまで写実的な絵を描いていて評判がよかつたのだがそれに敢然と訣別しそしてきびしい抽象の世界に入った。ガスとホコリで充満する工場で残業までしながら売れ易い絵を描かず純粹に絵を描く道を選んだのである。多忙な中におどろくべきたんねんな方法で独特の上前式点描法をみ出し猫きつづけた。

彼は年老いた母、妻それに三人の子供を養育しながら友達の世話をし、又山を買つてそこを一人で整地し、舞子の名物になりそうな面白い着想の住居をつくりアトリエをたてた。その余暇にこの綿密な絵を描き上げるのであるから、我々は彼が夜寝ないのではないかと思つたりもした。そして彼の作品は師吉原治良始め具体の連中、内外美術批評家や美術関係者の認めるところとなり、モダンアート協会の審査員に推せんされ、幾度か授賞し、海外展や国内の重要な展覧会に招待され外国の専門誌はじめ新聞雑誌テレビにも度々紹介されたりした。そして今や彼は彼の住む神戸周辺の新しい絵を志す若者にとつて知らぬものはない存在となっている。そして彼の教えをうけた若者の中から注目すべき芽がふき出してきている。彼は多くを語らない。これは絵画そのもので勝負しようとする彼の強い態度であるが彼の勤め先でも彼の絵の位置を全く知らないでいる人がずい分いる事実は彼のツツマシヤカな人柄を物語るのであろう。

かつて東京で具体展が開かれたとき具体メンバーのメンメンが新しい美術について盛んに論じ合い、ちよつと収しゆうがつかなくなつたときがあつた。そのとき今までだまつて聞いていた上前さんはブーツと一発お見まいした。ならび居た具体の猛者達もこの一発でこの論議の結論を見出したのである。社交や弁舌の多い現代美術界で不言実行の上前智祐こそ貴重な存在である。

具体美術協会々員
モダンアート協会々員
嶋本昭三

「具体ピナコテカでの個展リーフレット」掲載(1966年)